

---

# 意中之人

ゆちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

意中之人

### 【Nコード】

N2956F

### 【作者名】

ゆちゃん

### 【あらすじ】

恋の一步。それは君の言葉から。

今はまだ。（前書き）

昔の人は難しいことを言う。

今はまだ。

昔の人の言葉で

『恋ははしかと同じで、誰でも一度はかかる。  
なんて、よく言ったもんだと思う。』

高校2年の今の時期

周りはカップルだらけで

友達曰く、今が一番楽しい時期らしい。

はしかと同じ恋を一度もしたことないあたしは  
きつと、異端なのかも知れない。

夏休み少し前の7月頭。

テストも終わって

あとは適当に授業を受けてればいいこの時期は  
学校事態来る人が少ない。

うちの高校は午前中から選択授業とかがあるから  
全員が来る訳じゃないんだけど。

「小野ー」

「んあーい」

「何だその返事はー」

「考え事してたんですー」

小野愛梨、16歳。

愛なんて恋も知らないあたしに付いた名前。  
正直迷惑だつたりする。

まあ、親を恨む訳いかないけどさ。

「可愛くないぞ、その顔」

「元々可愛くないから、平気ですー」

「何か今日は妙に突っ掛かってくんない」

「先生、あれですよ。生徒がいつまでも言いなりになると思っちゃ駄目です」

「あはは、小野黒いぞ。先生心臓痛い痛い」

担任である現代社会担当の渡部先生。  
手には何だか沢山の資料を持っている。

「先生、まさかそれ持ってけなんて言うんじゃないでしょうね」

「お、小野今日はいつになく勘がいいなあ」

「・・・」

「そのうわあって顔やめろ」

「あたし今から帰って家の手伝いする予定なんですけど」

「あー、そうか。これを持って社会化倉庫に入れておいてくれ」

「先生聞いてます？」

「ほら、今の時期ってカップルばっかじゃん？暇そうなのって独り身のー」

「先生明日あたし午前中だけなんでお昼ご飯おごってくださいねー。  
それじゃー」

「お、おい小野！！！！」

あたしは先生にそう言つと

先生が持っていた資料やら地図を持ってその場を離れた。

鞆の中にはその日一日分の参考書とノート

それに足して資料やら地図やらでかなり重い。

「先生まで、独り身なんて言うことないのにさ」

社会化倉庫はそこから結構遠い。

階段を降りて、隣の棟に行つて、その棟の一番上。

エレベーターはあるけど、お年寄りの先生や大きい機材を運ぶ時しか使っちゃいけない。

これは明日先生にお昼ご飯とデザート付けてもらわなきゃだ。

鍵はいつでも開いてる社会化倉庫

渡部先生が適当だから知らないけど

結構汚い。

埃まみれだし、片付いてないし。

「よし、これでおk」

その周りだけ整えてあたしは社会化倉庫を出た。  
なんてーか

「なんてーか寂しいもんだねえ」

「・・・」

「こんにちわ、小野愛梨ちゃん」

あたしの脳内の言葉を遮つたように言葉を述べた男は  
廊下の柱に背中を預け、あたしの名前を呼んだ。  
金色の髪に、170cm以上はあろうと見える男。

「何か？」

「ん？ただ一人で寂しそうだなって」

「・・・寂しくなんかない」

「嘘付いてる」

「は？」

「愛梨ちゃんは今嘘を付いてる」

「・・・付いてなんかないよ」

「ううん、付いてる」

「何でわかるのよ、そんなこと」

「・・・ずっと見て来たから」

「・・・？」

「ずっと愛梨ちゃんのこと見てきたんだよ」

「・・・あたし、あんたの名前さえ知らないんだけど」

「同じクラスの、深山流だよ」

「深山、流」

「・・・これからは俺が愛梨ちゃんのそばにずっといるよ」

そうやって、

抱き締められて、

あたしは一瞬頭の中がショートした気がした。

『恋ははしかと同じで、誰でも一度はかかる。

はしかと恋は同じ？誰でも一度はかかる？

どんなかかり方の恋だっていいのかな。

誰か教えてよ。

□

好きだって言われた訳じゃないのに  
こつもドキドキするもんなの？  
恋って一体何なの？

ねえ、流は恋を知ってるの？

「・・・」

「・・・これから一歩ずつ進んでこ？」

その言葉に何故か頷けたのは、  
きつと、流の所為だ。

今は、好きじゃない。  
ただドキドキしてるだけなんだ。

今はまだ。（後書き）

どうも毎度ゆチャンです。

他の2つは恋愛とはちよつと違った感じなので

これはあくまでも『恋愛・愛情』をテーマにして  
書いていきたいなと考えております。

他の連載も書きます、すいませんorz

メールフォーム作りました。

何かあればどうぞ。

<http://www.formzu.net/fgen.ex?>

ID=P83852656

繋いだ手。(前書き)

何が起こったのかわからなかった。

でも、これはまだまだ序章に過ぎなかった。

・・・なんて、シリアスじゃないよ？

繋いだ手。

『ずっと愛梨ちゃんのこと見てきたんだよ』

「・・・！・・・いったぁー！！」

「愛梨あんた何やってんの」

「お姉ちゃん」

「あんた帰って来てからおかしいわよ？」

帰って来てから・・・

「そ、それは・・・」

「ん？何かあった？」

「な、なんでもないけど」

あれからどうやって帰ってきたんだろう。  
気付いたら今だった。

「って、お姉ちゃん今何時？」

「え？もう0時過ぎてるわよー」

「・・・あ、明日朝からだ！！！！寝なきゃ」

「ったく忙しい子ねー」

「おやすみ、お姉ちゃん！！」

「はいはい、おやすみ」

お姉ちゃんはあたしよりも10個上の26歳。  
結婚もしてて、うちの事務をしてる。

うちはおじいちゃんからみんな建築士。

今住んでる家のそばに建築事務所がある。

お姉ちゃんは結婚してからはデザインするよりは事務をしてて、旦那さんをサポートしてるんだって。

お姉ちゃんは結婚した時に家を出て旦那さんと一緒に住んでるんだけど

近いからたまに泊まりにくるんだ、勿論旦那さんも一緒にね。

少しだけ眠気に襲われる中、携帯が光った。

開くとそこには『流』の一文字。

ドキドキしながらそのメールを開くと。

『Date・7/9 0:38

From・流

Sub・明日

1 現からだよね？なら一緒に行こう？

朝迎えに行くよ。それじゃあおやすみ、愛梨ちゃん』

「・・・迎えに？何でうち知って・・・あ」

そうだ、思い出した。

流と一緒に帰ってきたんだ。

「愛梨ちゃん、緊張するのはわかるけどもう少し離れないで歩けない？」

「む、無理！」

「そう、なら」

流は気付くとあたしの隣りに立っていて、あたしの右手を取っていた。

「これなら、大丈夫でしょ？」

ニコニコ嬉しそうに笑って  
こっちの心臓を考えてほしいわ！

「どうしよ、緊張して寝れない」

「・・・愛梨ー？」

「何、お姉ちゃーん」

「寝れないのー？」

「うーん」

「んじゃ下来なさいなー」

お姉ちゃんがそう言つて階段を降りていく音が聞こえた。  
あたしは携帯を持って部屋を出る。

「あ、真之介さんおかえりなさい」

「ただいま、愛梨ちゃん」

「真之介、聞いてよ。この子悩みあるみたいなの」  
「悩み？」

「そつ、悩み。しかも恋の悩み」

真之介さんはお姉ちゃんの旦那さん。

お姉ちゃんよりも2つ年上であたしより12個上。

「こ、恋！？何で恋なんてしてないよ！？」

「んじゃー今日一緒に帰つて来たのは誰？」

「！！見たの？」

「人聞き悪いわね、見えたのよ」

「・・・あ、あれは」

「誰？」

お姉ちゃんは時々威圧的だ。  
そこでお姉ちゃんと真之介さんに事情を話した訳だけど……。

「その流ってというのがあんたの想い主な訳ね？」

「べ、別に想ってなんか……」

「ふーん、で何が気になるわけ？」

「……見てたってだけで、好きって言われた訳じゃないし。それに、あたしは好きかわかんない」

「……なんで？」

「言われたことが嬉しいだけなのかも知れないじゃない？」

「確かに愛梨ちゃんの言うことも一理ある」

お姉ちゃんも真之介さんも真剣に聞いてくれた。

まだ、流と話した時間はごくわずかで、あたしは流のことを殆ど知らない。

「時間はたっぷりあるじゃない？」

「……そうなのかな」

「さっき自分で言っただじゃない、好きって言われた訳じゃないって」

「流くんが本当に愛梨ちゃんのことを好きなら待ってくれると思うよ？」

「流があたしを待つ？」

「うん、愛梨ちゃんが流くんを知る時間」

流はあたしに

『これから一步步ずつ進んでこ?』と言った。

今はまだ、好きじゃないんだ。

でも流が抱きしめてきた時、あたしは確かにドキドキした。  
今までにない胸の鼓動。

あれは何だったの?

それからもお姉ちゃんと真之介さんは話を聞いてくれて

気付けば時計は2時近くを指していた。

あたしは部屋にすぐ戻ったけど2人はまだ何か話していたみたい。

「本当青臭いわ、あの子」

「今までにしたことない経験に戸惑うのは誰でも一緒だよ」

「確かにね!。でもこれで少しは進んでくれるといいんだけど」

「流くんが折れるのが早いかな、愛梨ちゃんが惚れるのが早いかな」

「あの流って子、どっかで見たことあんのよね!」

2人の会話なんて知らずにあたしは夢の中へ。

「・・・眠い」

「愛梨そんな顔してないで、さっさと食べなさい」

「あい」

「美里も眠そうな顔しないで、さっさと片付けて」

「はい」

結局あたしもお姉ちゃんも真之介さんも寝不足で。

朝からお母さんは機嫌悪そうだった。

お父さんと真之介さんは少し早いけど出社したみたい。

「愛梨ー」

「何ー？」

「流くん何時に来るんだってー？」

「えっと、8時15分くらいだって」

「うちから学校まではいつも歩きで30分。」

「1現から選択授業の時は朝HRがないから9時に教室にいればいい。」

「あんた髪ボサボサじゃない。ほら座って直してあげる」

「う、うん」

「いい？今日からあんたは昨日の自分よりも少し前に進んでるのよ？」

「進んでる？」

「お姉ちゃんはおたしの髪を整えながら、そう言う。」

「そばには流くんという男の子が常にいるの。そして流くんを知っていかなきゃいけない」

「うん、わかってる」

「あんた自身も変わらなきゃいけないのよ」  
「変わる？」

「流くんにもっと好きになってももらえるようにするの」

「・・・流に」

「その為にも服装とか髪型とか化粧とか色々気配らなきゃいけないことは山ほどあるのよ？」

「勿論内面もね？とお姉ちゃんは付け足す。」

「あたしは地毛が茶色いから染めたことは一度もない。」

長さは胸のあたりまで。

暑い時は結ぶけど普段はそのまま。  
制服はリボンを結構緩めにしてて、  
スカート丈はそれなりに短め。  
化粧は本の少しする程度。

「まあ、あんた地はそれなりにいいんだから少し気配る程度でいいのよ」

「・・・うん、わかった」

「はい、出来た」

お姉ちゃんはあたしの肩をぽんと叩いた。  
あたしは目の前の鏡を見ると、驚いてしまった。

「え、何これ」

「似合ってんじゃない、この髪型」

「あ、ありがとう」

お姉ちゃんは少し誇らしげにしている。  
あたしの髪はお姉ちゃんにいじられたおかげで  
みつあみチックになっている。

「愛梨、これあげる」

「これ時計？」

「あたしが高校生の時に使ってたやつ」

文字盤が薄いピンクで小さい腕時計。

お姉ちゃんはそれをあたしの左腕に巻いた。

「これね、あたしが経験したこと何もかも知ってるの」

「何もかも？」

「そう、初めて付き合った人のこととか、友達と喧嘩した時のこととか」

「・・・」

「ふと辛くなった時にこの時計を見るとね、この銀色の針は止まることはない」

「そりゃ時計だからね」

「・・・このまま時が止まればいいのに、そうすれば辛いことも何もかも今この時だけなのにつて何度も思った」

「・・・」

「けど、それは通用しないのよ。それを思い知らされるの、この時計を見るとね」

お姉ちゃんは何処か寂しそうにして  
あたしの部屋を出て行った。

時計は時を刻み続ける。

止まることなく、勿論戻ることもなく。

例え何があってもこの時計を見て、前に進めるように。

「愛梨ちゃん、おはよう」  
「お、おはよう」

流はメール通り8時15分に家に来た。  
嬉しそうにニコニコして、何かまぶしいんだけどっ

「流くん、うちの妹のことよろしくね？」

「あ、はい」

「お、お姉ちゃん中入ってよ！」

「うるさいわねー、少しくらいいいじゃんね、流くん」

「・・・はは」

お姉ちゃんはニヤニヤしてる。

あたしは流はそのまま学校に行くことにした。

「やっぱり流くんどっかで見たことあるわ」

お姉ちゃんの眩きも知らずに。

歩き始めて数分、会話がなくて困る。

何か話しかけたほうがいいんだろっけど、何も出てこない。

「・・・愛梨ちゃん、今日お昼は？」

「お昼？あ、渡部先生に奢ってもらっ約束してる」

「そっか、一緒に食べてもいい？」

「・・・！」

そ、そうだよ、これも普通なのよ愛梨！

このくらいでドキドキしてどうするのよ！

「う、うん。勿論いいよ」

「ん、よかった」

いつもニコニコの流、  
本当に嬉しそう。

あれ、でもそういえば

「ね、流」

「ん？どうかした？」

「え、いや、えっと・・・」

頬が暑い。

言いたいような言いたくないような  
恥ずかしくて言葉が出てこない。  
右手が宙に浮いてる。

「あ、手？」

「・・・！」

「昨日緊張してたみたいだから、無理強いはしたくないし」

「え、あ、そっか」

「繋ぎたかった？」

「そ、そんなことないわよ！！」

とは言ってみたものの。

繋ぎたかったのが正直なところなのかも。

「無理することないよ、愛梨ちゃん。ゆっくりでいいって言ったよね？」

「う、うん」

流はそう言って隣りを歩いている。  
手は繋いでないけど、ぴったり横に。

「あ、愛梨ちゃん」

「な、何？」

「髪型いつもと違うね」

「これ、お姉ちゃんがやってくれて……」

「そうなんだ、可愛い」

流のおつきい手が頭に触れた。

「う、これは撫でてゐるってこと！？」

しかも可愛いつて・・・

お姉ちゃん、真之介さん

あたしは登校中だけでも既に白旗です。

どうしよう、流はきつと天然なんだ。

可愛いってすんなり言えちゃう男の人ってどうなの？

もう心臓バクバクだし、何言えはいいかわかんないし、

どうすればいいのよ……！！！！！！！！

助けてお姉ちゃん！！！！！！！！！！

繋いだ手。(後書き)

ゆちゃんです、どうも。

何か1話からして加速気味な愛梨ちゃん。

流くんは常にニコニコな子(の予定)

これからが愛梨ちゃんにとって大変ですww

メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.ex?>

ID=P83852656

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2956f/>

---

意中之人

2010年10月11日01時24分発行